

翻刻『よみ売三巴』

翻刻の会

- 一、底本には大阪府立中之島図書館の七行四十丁本を用いた。
- 二、底本を忠実に翻刻することを原則としたが、次のような校訂方針に拠った。
  - 1 本文は文字譜を手掛かりにして、適宜改行を施した。ただし、道行・景事の類、会話の途中等では改行しなかった。
  - 2 各丁の表・裏の終わりは、丁数の数字とオ・ウの略号を（ ）で示した。
  - 3 仮名は現行の字体に統一した。ただし、感動詞、送り仮名、捨て仮名の類以外の、本文中の「ニ」「ハ」「ミ」は「に」「は」「み」とした。
  - 4 漢字は、一部の異体字を除いては、原則として通行の字体に統一した。
  - 5 漢字・仮名ともに、誤字、脱字、当て字、仮名遣い、清濁は底本の通りとした。
  - 6 特殊な略体、草体、合字等は現行の表記に改めた。
  - 7 畳字は、平仮名は「ゝ」、片仮名は「ヽ」、漢字は「々」に統一した。ただし、「く」はそのまま残した。
  - 8 文字譜の類はすべて採用し、本文の右傍の適切と思われる位置に翻字した。
- 三、本文の翻刻は、次に掲げる翻刻の会（学部学生の研究會）の会員によってなされた。

大関綾、小枝史佳、小林奈央、坂上杏野、竹田有佳、安川絢菜、余田智恵美。

文字譜、改行及び本文の最終確認は山田和人が担当した。

（山田和人）

きふの徳兵衛 よみ売三巴

座本近松門左衛門

新地涼見の段

ハヤロケトキ  
ヤアへな本の午若丸五条の橋にて名も高き西瓜の切り売なされける。扱又其日の出立には真瓜の小具足。白瓜の小手脚当な  
んばきびの太刀かたな。浅草のりの御装束にふのりの薄衣打かづきはに立ッ者をしたがへて。西瓜を千に切給ふめさまし  
かりける有様なり(二オ)よいくのよいとな。ありやしたよいとこな。声も揃への桃燈を。はやし立テてぞ通りける。  
中ウキン  
難波祭の賑はしく夕火に。照す七軒の。客は名うての平野屋武右衛門。お初ッを揚て夕涼。亭主諸共出来り。うかぬ調  
子の不機嫌顔。なんぼわいらが面白がつてもおりや一トつても面白ない。ならず者の徳兵衛に義理立テて。なんぼおれをふり  
付ケても。金の威光で押ス時はめつたにおされはせまいがな。ヲ、武右衛門様シの間とむない。又しても金くくと(一ウ)  
わしや一トつても嬉しうない。勤する身は一チ様に皆親方に任せたからだ。買れるは勤のならひ。お客をふるは女郎の常。  
市さんそふじやないかいなア。ムンそふいやこつちも買が意路。われも随分ふり付ケて。意路とくくの真中にはさまつた徳  
兵衛め。番頭がいに一寸シも。動しやせぬとしらける座席。亭主おつ取。其争ひをさらりツと。我等貰ひの新宅で一つ上  
れと口車。のらぬお初ッも諸共に。打連レてこそ立ッて行。  
地色ワ  
貴賤群集の其中に。下向と見へて品かたち賤しからざる風(二オ)俗に。年シは似合ぬ男ぶり休らふしほに汲で出る。茶の  
端香より気の花香。吹さまされし愴気より。あちこち尋来るお岸。夫レと見るよりコレ義助殿。お重様を連レ立ッてあるかし  
やんすはかまはぬが。人の口には戸が立テられぬ。とかくおまへと訊有ルやうに。聞ク女房の身にもマア。成ッてくれたがよ

いわいなア。ならぬ世帯を苦にもせて妾狂ひと人さんに。諷はれてはし下んすなと悟氣の角も和らかに。折る程猶義助はむつと。コリヤそげめ。妾おかふが女房さろが。余所の人が何ンでかまはふ。やつぱり儻しがりんきから。乳呑子(二ウ)一人リ内に置キ。殺してかなしまひおらふ。早ういんで行水の。湯でもわかして待ッておれと。いはれて何と返答も中にお重が氣の毒顔。云ぬはいふに増花の。お岸は別れ帰りける。

お重は跡を打見やり。お岸様ノのアノ腹立ち。皆尤と思へ共。わしが口から今さらに云にいはれぬ比身の上。なぜ打明ケては下されぬ。連レ添人に隠すとはあんまり気づよい義助殿。どふぞ仕様はないかいのと聞もあへずハテよござります。世間ハ勿論。女房に迄隠し包む私が胸の内。追付ケ知るのでござりませう。必お案じなされますなど。氣を引キ立る折からに。

平野屋の徳兵衛はお初ツに(三オ)迷ひ北南。けふ武右衛門が揚と聞川崎屋から涼場へ尋廻りて来りしが。こゝも重るお重が縁。互にふつと顔見合せ。ヤア義助お重殿。是はしたり徳平衛様どこへお出なされました。さればいのふ。近ソ所の衆に誘はれて宮参りの戻りかけ。ヤア夫レはそふとお重殿。つどく文の返ソ事もせず。何かの事はゆるりつと。其内お目にかゝりませう。さらばと行んとする袂をひかへ。きのふにかはらぬけふ迄も。おまへとわしが馴初し其恋風が吹送る鷹の翅の文月も。たつた一度の御返事に。思ひ候べくの。筆のはこびの誑しさは。ほんにせいもん神かけて。お(三ウ)前に立ッる私が心。それに難面お心は。聞へませぬとすがり付。恨涙ぞ誠なり。

申徳兵衛様。お心せきは尤なれど。せめて暫ソの内なりと。コレ女コ衆。お二人リをおもやへ連レましていて下され。サアくお越とす、められ。ハテどふなりとせうことこの。なした報と手を引いて。川崎やへと連レて行。

跡へいきせき何や共知しぬ男が立ち止り。見廻すこなた。義助じやないか。半九郎様かどこへお出なされます。どこといふ  
たらわれが所へ。何ぞ急な御用でも。有ル共。義助もふよいかげんに出してしまへ。私に出せとは何んでござります。  
ハテとほけなやい。高は播州しかまの家中。桂曾平殿の妹お重。(四オ)云号の夫トを嫌ひ。われが主の徳兵衛とくさり  
合イ。ふけつて来てわれが所にかくまふて居る事がぐれて。則チ曾平殿が詮義の為。こちらの内を旅宿にしてゐられる上は。  
もふ隠しても叶はぬ。きりく出して渡せ。くとのつ引キならぬ詞詰。義助とつくと胸をすへ。いかに私がかくまひま  
した。サア渡せなら渡しもせうが。今お渡し申ては却てお為に成ませぬ。そこを存じて今四五日お頼申すは半九郎様。聞  
入てさへ下さらば。浪風立ずお渡し申ませう。ム、夫レ程に頼む事。聞いていや共いはれまい。したが無手ではいかぬ。金が  
入ルが合点か。ハイ。イヤ申シ半九郎様。命づくにも及びし(四ウ)大事。金で納るあなたの胸は。ハテ高は密夫。世間  
通用は三百目。夫レから積て金三三十両。夫レさへ有れば兄じや有ふが何んで有ふがさつぱりと済してやらふガ。われ金の  
工面が出来るかよと。己が呑込金あつかひ。してやる工としられたり。お重はかく共しらずして戻りか、りし此場の時宜。  
様子あらんと葎簀かげ。身を忍びてぞ隠れ入ル。  
ハテもふ金でさへ済ム事なら。其日暮しの私成レ共。人の命を助る金。どふ成リとして。ム、工面が出来るか。サア出来る工  
面をあなたにちよつと。お隙は取ラぬししが内。アレつい向ふの川崎屋で。一トつ上たいマアお出と。頼ム追従口上手。  
伴(五オ)ひてこそ入にけり。

始終の様子葎簀のかけ出るお重が物思ひ。今のは慥にわしが身の上。尤金で済ムとはいへど。あの人の手で何ンとして出来

ぬ工面も成ル様に。いふてみやしやる胸の内。割ては見ねど苦しさを。聞ケテは聞程徳兵衛様のお命にもかゝる事。かういふ中子も心せく。金の才覚いかならんと思へど。女の跡や先キ。同じ思ひに。くれ竹のおはつは漸武右衛門が。座敷キをそつとぬけめなき恋に心もうつとりとしらぬ二人が背中同士。恟り立のくお初が袂お重がひかへて。コレ申。見ればあなたは此里の勤なさんすお方そふな。馴々しい事ながら。勤と色に身を任せ。お客とやらの氣に（五ウ）入て。可愛からるゝを教てたべと夕暮レの。入日まばゆき花紅葉。顔に照そふ風情なり。

お初もにつと会釈して。ムンついに見馴ぬ女中様。つらい勤の物好キは恋と見た目は違ひはせまい。云かはした殿達チに。逢たさ故の事ならば。仕様のやうも有そな物。ふかい様子はしらね共お頼なざるに引キはせぬ。数ならね共天満屋のお初といふは私が事。客は女の相互。訳を包まずいはしやんせ。ムンそんなりやお前は。武右衛門様とふかう逢て居さしやんすお初様で有たかいな。わたしやお重といふ者でござんすと。聞て恟り。そんならあなたは義助様。に訳の有ルお方じやな。お名は聞ケ共（六オ）逢たは初メ。是は。くゝと両方が。つい馴やすき女コ同士。イヤ申お重様。夫レ程に迄思ひ詰。つらい勤の辛抱も。厭ぬお前のお心はへ。サイナ。何を隠そふ平野屋徳兵衛様とは。国からの深い縁。二云号の夫を嫌ふて欠落して来た私が身の上。早国元へもれ聞へ連れていぬるか金出すかと。のつ引ならぬ夫トの為。君傾城に売れても殿御故ならいとやせぬ。すいなお方と見込ンでお頼。どふぞ思案を俱々に。若シ比金が調はねば私は元來徳兵衛様。国へ引クとの悲しい噂。どふぞ命が助けたい。頼まするとかきくどげば。おはつも俱に身にかゝる悟氣は失て徳兵衛が。命（六ウ）をかばふ真実の涙に泪。押シとゞめ。様子聞ケ程御深切お心根がおいとしほい。徳兵衛様シの事なれば私もちつとのがれぬ中。談合

せいでよい物か。マア何もかも私まかせ預けてお帰りなされませ。委細は文で跡からと。聞ク悦びも身に添てお重は別れ帰りける。

お初が思ひ。とつ置イつ。思案茶店の門よりも。硯の汝の水鏡短い心延紙に。しめし参らせ候べくの。文体ちらと武右衛門が。コリヤお初。わりやマアこんな事しやうで。ようおれが座敷キを抜けたな。ドレ其状を。イエこりやならぬ。比文はな。わしが大事の御方へやる文。ム、そりやしつてゐる徳兵衛め。そふいやもふ猶見にやならぬと(七才)引たくつて武右衛門が。読でこく独笑。ム、すりや比金さへ調へば。おれが心に従ふ気か。サコレ。従ふ気なら比金は。只今でもおれがやる。エ、。サアどふじや。くとしなだれてもたれか、りし後より。戻りか、つた徳兵衛が。ホ、ヲ武右衛門殿こりやおたのしみ。コリヤお初。わりやマアかはつた事するな。ガちつとわれに用が有ル。こつちへこいと立寄つて。引キ立る手を武右衛門が。ふり放して。ヤイ毛二才め。こりや儂何ひろぐ。ア、イヤあなたには構はぬ。比げんさいめと立寄りを。そふはさせぬとたぶさ髪。引ッ立る手にお初が取付キ。かんにんしてと泣託る。われには構はぬ比泥坊と。髻を取つて引寄する。折ふし(七ウ)義助が戻り足引ツかづいて糸のころ投。類も骸も砂まぶれ。ほうく起てへらず口。こりや手ひどいめに合したな。何シでうぬは邪魔ひろぐのじや。ヲ、此お方の肩持にやならぬ此義助。打擲ひろぐによつて。夫レで投けたが何とすりや。ヤア下々手代の徳兵衛め。番頭役で異見するのじや。そふぬかしやもふ了簡がならぬはと。割木を取て打かけるを。身をかはして引たくりた、みかけてりうくく。腰をか、へて立上り。アいた、く。コリヤえらいめに合しおつたな。儂レ此意趣。待ッておれよと睨ミ付けてぞ逃帰る。

詞  
イヤ申徳兵衛様。御無念シに有ふけれど。今のを腹いせにして早うお帰りなされませ。(八才)じやといふて人中で。こふ打擲にあふては。一分シ立ぬとかけ出すを引キとゞめ。ア、申シく。お腹立は御尤。ジヤガお前の顔は此義助が立テますませうと進られ。無念を胸に徳兵衛が又かけ出すをむりやりに伴ひてこそ帰りける。

詞  
ア、是で落付た。シタガ半九郎が詞の端。聞捨ならぬ金の才覚。コリアこふしては居られぬと。かけ出すむかふ揃の挑燈。よいくよいく。ありやこりやよいとなア。道をふさげば身をよけて。跡へ戻れば是も又。よいくよいく。ありやこりやよいとなア(八ウ)と。取巻ク挑燈武右衛門が。喧嘩の尻と見へにける。

詞  
天下の大道を我俣にふさぎ邪魔ひろくは。扱は武右衛門に頼まれて。此義助を畳に來たか。ヲ、よい合点じや。武右衛門様は出入の旦那。最前シの意趣ばらしおいらが仕返し。うぬが骸をたゝみ挑燈。観念ひろげと口々に呼はれば。ヤアちよこ才なた、んで見い。そふぬかす頬げたから。擲いがめと拍子にかゝり。なんとしやうちう忠八が突出す挑燈ひつつかまへ畳かけてめつた打。足も肘もいたみ酒叶はぬ赦せと尻込の。もろみのき酒。吉六が指図一度に取付クを。ふみ付く踏込粕よいくのよいとなア。ありや。こりや。叶はぬと逃ケて行。ヤアたんばさかや(九才)のさる若後家がやうし小ざけを手にかけたりし内のとうじに勘九郎が。どつこいやらぬと取付クをかづき投にて踏飛せば跡へ同じく白酒の。拍子弥二郎がき、酒き、腕後がらみに取付クを。身をかい沈んで前へどつさり又取付を茶店の茶釜天窓へすつぱり月夜に挑燈。足早にこそ

白髮町の段

商人の。店へ日の出の東角。西横堀の川筋も流れは。同じ白髮町。商売辛き醬油も古きしにせを平野屋の。久右衛門辻すつぱりと。切レ味もよき打物を。片店出した看板に。現金かけ直なかりける。

主シは後生一ッ遍に取ちらし(九ウ)たる諸事万シ事。見まつべ役をこうにきる。下女のおさつが納戸より。ア、草臥た。門トは祭でどんちやんいへど。何一トつ見には出られず。お家様が死しやつてから。わしがしんどが増えてきた。其かはり給銀も増えて取れば。是程のしんどは有中チ。ドレ一ぶくとたばこ盆。けふり輪をふく浅間山。顔も心もあいそなき。番頭武右衛門奥より立出。コリやおさつ。たばこ所じや有ルまいがな。けふ旦那の京登。追付ケ舟もいふてこふが。着がへの廻り。弁当から茶びん風呂の用意はよいか。足元トから鳥の立ッ様に。ばたついて物でも割たら。給銀で差次クぞよ。ヲ、いしこ。アノいふた顔わいの。何ンほお前が番頭でも。(十オ)そんな事教られ比奉公がなるかいな。けさ起てからすはつたは今が初メ。弁当のおかずに焚て置いた芋とかまぼこ。旦那様よりこな様シの。夜食のさいにと志。退ておくわしが気が露程でも有ならば。ほんに延した給銀もお前故なら打込シでと。思ふに任せぬむごい心。覺て居さんせ武右衛門様シと掴頬はる爪長も。色にはしどけ。なまめけり。武右衛門夫レと分シ別の。底はおはつにやる銀を。せしめてくれんと。心にうなづき。今に始メぬそなたの深切。あつや寒やに風引いて。食をくはねば氣にかけて。喰す様にと菜拵へ。二日酔には水糝。よそへ出やると土産物。或はみたらし(十ウ)岩おこし。ほんに焼餅の錢もたまるまいとくふ度ごに悪ルふは受ケぬ。去ながら。氣強いふたも人目を遠慮。何のこなたが憎からふ。かはゆふてくよその女子はどんなやら。

目にさへ付ぬおれが氣を。まだ疑ふてたもるじやある。其云いひわけは永ながい未来。こらへてやいのと伏地ハル拜中む手元トをじつと引キ寄セて。申詞武右衛門様ンへ。夫レ程迄にわたしが事。思ふてゐさんす事ならば。是迄やつた文の返事。書地中ハリ事ならねば口先キで。つウいこれかふと。たハルんハふウを。なせにさしては下中さんせぬ。やつハルぱり色嘘うそじやと突ハル放はなし中そキむハけるハ膝ひざを。猶色引キ寄セ。思詞ひ合ハた二色人リが中。末すゑ長ふ添そひたいと。思へど叶はぬ。此武右衛門は今ン夜中にせまつた命。夫レを知りつ、忍び（十一才）逢。枕をかはした其跡ハでは。一ばい心に未み練れんがおこり。わしよりそなたの為ならずと。思ひ切切たるあいそづかし。必地ハレ恨レてたもんなと聞ヒて詞悔ひり。コレ申今夜中にせまつたとは。何でお前は死るのじや。訳を聞ねば何ほでも。はなしはせぬと取付地カレむツとはすれど銀ウ設もけ。爰ハが大事の辛しん抱ほうとわざとおろハく。泣中声しにて。い詞ふまいとハ思へ共。あす迄待タぬわしが命。何を隠そふ去ル屋敷キのお侍に。渡さにやならぬ為か替か金シ。廿二両といふ物。四五日跡に盗ミ取ラれ。どふぞと思へど才さい覚かくならず。あすはぜひ共侍が取にくるは定ちやうの物。ないといふたら金輪際こんりんざい。詮せん義ぎしぬいた其跡で。手打にあふはしれた事。逆さかも死べき命（十一ウ）なれば。待に逢ぬ先キ死るがせめて身の言い訳わけ。とはいふ物のそなたを捨て死るとおもや。今も引キ入ル様になり。こちやあたまがふらりしやらりと。名残リが惜おい死とむない。わしが心こが竹屋なら。割わて見せたい女子じやと。わけも涙はひつつとも。出ウもせぬ物を無理やりに。すハり上上く。流る、汗あせを目めのふちへ。付としらぬフシこなたには。誠地色ハルと思ひ涙を止とめ。今詞の詞を聞ク上は。疑ひもなふ私が夫ト。女房の身として何とおめく見て居られう。こんな事も有ふかと。溜た々たしたわたしが金。大方一歩ふで十四五両。肌身はなさず是爰に。命がはりの此金を。お前に渡すと差地ハル出せば。夫中誠か（十二才）忝い。是さへ有レば落付いと。取ハル手にすがりコレイナ。夫詞婦のかためについちよつと。ハテめつぼうな。昼ひる中に誰レが見まい物じやな

い。晩ばんから旦那も留守るすなれば。宵よからでも抱かかて寝る。ヲ、嬉うれし。必かなら夫をを違ちがへまいぞへ。ハテ念ねんには及およぬマア次つぎキへ。あい  
の返かへ事こともいそくと。望のぞ叶なひし新あら枕まくら。殿う御待ごまちツ夜の髪かみ容かたち。結ゆて置おかふと立たッて行い。

うまいやつでは有あわいと。納うる銀かねと兼かね言ことを。身みにぞつもりし天あま滴たみやの。お初はは一人ひとりリ平野ひらやの。内うちを覗のぞけば見み合あす武右衛門。  
其その仮庭かりにわに飛とんでおり。ヤレお初はか。逢あたかつた。サアくこちへと手てを取とラレ。主ぬしは違ちがへどいやおふの。返かへ事ことそこく内  
に入い。武右衛門ぶさゑもん傍あたを見廻みまわし(十二ウ)て。此こ中ちゆういやつた金の無な心しん。聞きてはやらふか其そのかはり。又またおれが無な心しんきくか聞き  
か。ヲ、武右衛門ぶさゑもん様さま何なにじやいな。金かねづくで逢あ程ほどなら。お前まへに無な心しんはいわぬわいな。ム、そんならどふでも徳兵衛とくべゑに。サ  
イナ其その徳様とくさまも。さつぱりと訳わけ立たた上うお前まへの望のぞ。ム、面おも白しろい。望のぞさへ叶なふたら。そつちの望のぞもコレ爰こゝにと。又また取と出す以前いぜん  
の金かね。飛と立たッ様さまには思おもへ共とも貫ぬへば跡あとの憂うれ思しひ。なれば夫おの身みの難なん義ぎ思し案あん。吐と息いきを次つぎの間に。人ひと音ねトすれば武右衛門ぶさゑもんは。見み  
付つられしとむりやりに打う連らへ納な戸とへ入いにける。

地ち色しき中ちゆうは様子ようす白紙はくしの。障しょう子し押おシ明徳兵衛めいとくべゑが。そぶりいかゞと久右衛門くさゑもん。隠かくれ聞きク共ともあなたにはしらず思おもはぬ勝かちッ手口てぐち。柵さくか  
らおろ(十三オ)すかけ硯すずり。何なにか子細こさいをかくとだにする墨すみさへも氣きにつれて。ゆがまぬ。心こゝろ一ひと筋すぢに筆ふでの命毛いのちのけ。なが、れ  
と。願ねがひも厚あつき巻ま紙しを。取と出す下したに小判せうばんの包つみ。此こ金かね爰こゝに何なにとして。おれが違ちがふ硯箱すずりばこへ。誰たれカ入いレ置おキしと。取と上あて打守うちまもりり。  
ム、見みれば包つみに封ふうもなく。凡おほ金子かね十じゅう両りやう余あり。ハテめんようなど徳兵衛とくべゑが。小首このかぶ傾かたむけ一人ひとりリ言い。お重おむ殿とんを始はじめメ。かはいそふ  
に義助よすけに迄いた。苦く勞らうをかけるも元もとは金故かねゆゑ。おもき願ねがひと神様かみさまも。納な受う有あて徳兵衛とくべゑに。天あまより下くださる此こ金かねか。ア、い  
やくく。譬たと主しなき物ものにもせよ。奉公ほうこうの内塵うちぢり一本いっぴん此こ身みに付つる謂いははなし。みすく助すける金かねなれ共とも。お主おぬしにかへぬが心の

潔白けつぱく。旦那に渡した上(十三ウ)の事と立上る地色ハル久右衛門。ホ、徳兵衛か。武右衛門はどこぞへいたか。ア、いやさつきに迄内に居られました。イヤ申旦那様。私が硯箱すずりばこに入すつて有た此金シ子。あなたに覚さがござりますか。指出地ウす顔ハルを打守り。人は氏うじより育そだちといへど。魂たましひの置おキ所ところは育そだちより只氏うじ素性すじやう。今久右衛門に使つかはれても。昔を顕あはすそちが身の上。若い内は取分かくけて主親の物取隠し。遣つかひ捨するはま、有ル事。ましていはんや此金シは。主まシもなければ印いんもなし。遣つかひ捨すても科かにはならず。誰たれカ点てんの打うち人もなきに。其身み身に付つけぬ正直ちかきな其心こころを見よふ為。わざとそちがかけ硯いんへ入いれ置おいた此金シは。京のおほかへ上あげる金かね。(十四オ)しる通り久右衛門が跡あとを継つぐべき忤せがれもなく。一代いちだい仏ぶつケにならふかと夫つまレ計はかりが心が、り。そちさへ得心しんしてくれたら。此家屋敷このいえキを譲ゆづらん為。かういへば久右衛門が。破家やぶれを譲ゆづる逆さか。性根しやうねをためすと思ふなよ。そんなさもしい男おとこじやない。身代みだい仕廻しまわふは厭いとはねど。先祖せんぞを潰つぶすが残り多おほさ。此年このとし迄忤せがれも持もたず。商売しょうばい大事朝だいじちゆう夕ゆふを安楽あんらくに暮くらすに付つけても。そちが様さまな究竟くつじやうな子があらばと。思おもふ程ほど猶なほ不ふ便べんさ増まり。悪わるい性根しやうねの出いぬ様さまと。願ねがひ込こんだ珠たま数かずよりも。遙尊はるかたうとい心の誠まこと。其誠そのまことを見るに付つけ改あらためて異見いけんが有あり。勤こまする身の誠程まことほど。誠まことなきと心得こころえで。必かなよしなきかためをすな。引ひかれぬ義理ぎりに(十四ウ)ひかされて。煩わづひでも有あり事ことか。満まん足ぞくな体からだをば刃やいばに其身そのみをはた物の。骸かみを野末のすえにさらさる、。跡あとに残のこつた主ぬしの身みは。老木らうぼくの春はるをなくさめの。花はな逆さか何なにを見るみべきぞ。死しんで浮名うきなを立たつると。生なまきて其名そのなを上あげるのと。思おもひくらべて見てくれと。齒はに衣きぬきせぬ真実まことは。我われ子こに異見いけんすることく恩おんと。涙なみだやこもるらん。徳兵衛たくとみ置おきに喰く付ひて。親おやもいたさぬ有ありたい。異見いけんの御恩ごおんは須弥しゆみ大海たいかい。あさふとらば此身このみの罰ばち。何なににも申まさぬ旦那様だんなさま。是迄このまの不奉公ふほうこう真平まへいお赦ゆるし下さりませと。有あり事こと共とも思おもひ出いす。目めには涙なみだの露しづれ時雨ときり。心こころを不ふ便べんと久右衛門に。老らうの一途いちづの強こほ。(十五オ)異見いけん。一度いちどはいふて

見る物の。そちが性根に見込有ル魂を見すへたら。女郎にもせよ誰にもせよ一生連レ添女房ならば。一世一度の三々九度。何もかも久右衛門が。胸に納るそちなれば。金て命はかはれぬと。そこへ心を付けて見よ。入らいで叶はぬ事あらば。金の入ル筋咄して聞せ。身代相応惜みはせぬ。命は大事金は湧物。目をかけぬ其方が。磨た性根を必。泥に埋むな合点かと。残る方なき親方の。しんみの詞身にこたへ。お初か中を得もいはず重る思ひ門の口。久右衛門様はお前でござりますか。一番舟が只今出ます。御用意よくば早お出と云捨帰る(十五ウ)家内には。待チに待ッたる京登。武右衛門が得手に帆。おさつが指図に下男。風呂敷包弁当箱。わいかけ出る表の方。旦那を見送ぐる徳兵衛武右衛門。二人り共留主ようせい。さつよ万事に気を付ケいと。出て行跡の気か、りは。只徳兵衛に目を付ケて。舟場をさして急キ行。引違ふて向ふよりいつこ河内屋半九郎。門ト口からわ、り声。徳兵衛の密夫仕。用が有ッて逢に來たと。ずつとはいつて見合す顔。徳兵衛は武右衛門が。手前を思ひ空とほけ。イヤ申半九郎様。用事あらば声ひくにおつしやつても事は済ム。夫レに何ぞや徳兵衛を密夫とは。身に覺なき雑談。何国の誰しを(十六オ)密夫した。其人を聞ませう。いふないやいく。われしるまいと思ふか。高は播州しかまの侍。桂曾平が妹お重。云号の男の有に。夫レをしつてうぬがせ、くり。連れて戻つた此大坂。難波橋の義助めが所にかくまふて有事聞付ケ。尋にござつたお重が兄貴。詮議にあふてはむつかしかると。義助めが段々の頼。二十両で取扱此半九郎が済てやる。早ふ金を工面せいと。云渡したは難波祭。夫レから四五日日数は立テど。何の返事もしけつからぬ。もふ義助めに構やせぬ。かはりにうぬを連レ帰りおさふに渡しや事は済ム。サアくうせいと引立る。手詰の難義徳兵衛が。身の誤りに一句も(十六ウ)も出ず。武右衛門中へわつて入。半九郎様とやらの

お詞。一つもむりはござりませぬ。とかく憎いは手前の徳兵衛。御勝ッ手になされませとお渡し申が道なれ共。折悪ルふ親方も他行。此儘にてやりましては第一番頭の頬よごし。私が磨て出ますからは。此出入を晩方迄わしに預けて下さりませ。ム、そふいふ貴様は誰レじや。私は此家の番頭。ム、半時も了簡せぬやつなれど。挨拶人が面白い貴様を立てて待つてやる。急度せりふが出来るかや。ハイ成程。青二才とは又格別。慮外ながら番頭の武右衛門。ム、そんなら諸事は暮してから。エ、仕合者と睨付ケ。詞詰して半九郎。我家をさして帰りける。

跡地色中(十七才)にしほく徳兵衛は。無念ハルを隠し手をもじく。思はざる難義の所。武右衛門殿の情にて。此場は一旦納りしが。若シ又晩に半九郎へ。こなたの返シ事はハテ氣遣ひな事はない。高のしれた金扱あつかひ。二十両さへやりやつい済ム事。そんなら其金。ヲ、取かへて済マしてやる。エ、忝かたじけない。此礼何と言様が。ヲ、有共く。われが世話をする代。礼は詞も絲瓜へちまも入ぬたつた一ト色貫もちはふかい。ム、貫はふとはソリヤ何を。イヤ外の者じやない。天満屋お初。今さつぱりと思ひ切。此武右衛門にくれといふ事。エ、とはどうじや。二十両といふ大まいの金。借てやるがこつちの無理か。所詮しよせんわれが手金はなし。望姓もちでいらすにお初が中を。二十両で武右衛門が買か買か(十七ウ)てやる。但たゞしはいやか。いやなら直ち直ちに半九郎に手渡して埒らちしよふか。サア夫レは。サアくどふじやと詰かけられ。詮ハル方涙心付キ。思詞ひ切ルにも切ぬにも。とかくお初に逢た上。イヤコリヤ徳兵衛。お初はとをから爰に来て居る。名残なごりに一ト目逢せてやると。のれんひらりと連フシして出。サアお初。最前さいぜんからいふ通り。望ミの金を徳兵衛にやりさへすれば。心こ底ていはとゞくといふ物。夫レを功こうにさつぱりと。思詞ひ切たといふ証しやうこ拠こは。取かはした二人が起請。おれが前で取戻せ。早ちうふくとせつかれて。二人が心こどぎまぎと互たがひにしれた心こ底ていも。

今さら何と疑ふはけく真実がかせに成り出兼る。口と。目は涙。武右衛門見兼膝立テ直し。コリヤ(十八オ)又お初どふじやぞい。早ふすつぱりいふてしまや。アイとはいへど云兼る。ハテ扱何シの遠慮する事が有ル。サアいやいの。アイ。サア。夫はと計り涙くむ不便や。お初はなくも。申シ徳兵衛様シ。いはで叶はぬ身の入わけ。必恨て下さんすな。是迄なじみし中なれど。お前とつながり居る内は。わたしが身の憂難義。此後チ一所に成ッたらば。今の錦に引かへて。あすの檻樓を身にまとひ。指さゝるゝがわしやいやじや。お前に貰ふた此起請。戻すが縁の切れ目じやと。思ひ諦。徳兵衛様シ。嗚腹がたとけれど。いはねばならぬ品に成り。あいそづかしもよい様に。ふつつり思ひ切たぞへと。起請をわざと打付けて泣かぬ涙。ぞ道理(十八ウ)なり。

口にはいへど心には。よもやと思ふ徳兵衛も。皆武右衛門に見せかけの声あらゝか。ヤイ生キ盗人の生キ衛。今迄そふした心とは。しらなんだが腹が立ッ。こつちに有ても入ぬ起請おれも戻すと投ケ返す。二人が争ふ真中に。武右衛門がしたり顔。ハゝゝゝ、立るはくゝ。コリヤ徳兵衛。其起請を取戻し縁切ふ計りに。二十両の扱事。めつたに借てよい物か。アノ馬鹿な頼わいの。ドリヤ旦那の留守事。憚なくお初を抱いて楽しみ場。拵さそふと立上り。奥へ行間も有りやなしノウ徳さんこらへてといはんとせしが。立ち兼て奥を憚る忍び泣キ。胸のかずく云兼る。心。途方にくれの鐘いと哀さ。まさりける。(十九オ)

徳兵衛涙押しとゞめ。コレお初。今のそなたのあいそづかし。常のやさしい詞より。いとゞ我身に深切の。重る月日を今迄に。辛抱仕やつたかい有ッて。追ッ付ケほんの女夫になる。約束堅い二人が起請。ちつとの間でも返すといふは。とふや

ら夫レが気にかゝる。武右衛門が見ぬ内に。早<sup>地ハル</sup>ふ取かへ戻してと。指<sup>ワ</sup>出す起請<sup>色</sup>引<sup>色</sup>たくり。お前<sup>詞</sup>計<sup>詞</sup>り合<sup>がてん</sup>点<sup>点</sup>して。面白<sup>おもしろ</sup>そふに何  
 じやいな。相<sup>詞</sup>イ手<sup>詞</sup>になる隙<sup>詞</sup>がない。殊<sup>ことごと</sup>更<sup>更</sup>こ、の武右衛門様<sup>詞</sup>と。云<sup>ワ</sup>かわしたわしなれば。物<sup>詞</sup>もいふて下<sup>下</sup>さんすな。こふいふ  
 からは嘘<sup>うそ</sup>でない。証<sup>しやうこ</sup>拠<sup>拠</sup>を見<sup>見</sup>さんせ徳<sup>徳</sup>さんと。持<sup>地ハル</sup>たる起請<sup>詞</sup>をずん<sup>詞</sup>くに引<sup>引</sup>さき<sup>詞</sup>く。口<sup>ワ</sup>に含<sup>かく</sup>んで嘔<sup>かみ</sup>したき泣<sup>上</sup>ク音<sup>音</sup>を隠<sup>カス</sup>す。(十  
 九ウ) いぢらしさ。追<sup>ハル</sup>の徳<sup>徳</sup>兵衛<sup>兵衛</sup>きよつとして。アノ真<sup>詞</sup>実<sup>詞</sup>おれを見<sup>見</sup>かへるのか。アイ心<sup>詞</sup>のかはるは勤<sup>勤</sup>のならひ。ム、すりや  
 どふ有<sup>有</sup>つても武右衛門<sup>詞</sup>に。抱<sup>抱</sup>れてねる性<sup>しやう</sup>根<sup>根</sup>じやな。ヲ、くど。お前<sup>前</sup>も粹<sup>すい</sup>の様<sup>様</sup>にもない。破<sup>やぶ</sup>つた起請<sup>詞</sup>は再<sup>また</sup>びつがれぬ。わし  
 が心<sup>心</sup>はあの通<sup>地ノル</sup>りとそむける。顔<sup>ハル</sup>にこたへ兼<sup>ウ</sup>。もふ是<sup>是</sup>迄<sup>迄</sup>と徳<sup>徳</sup>兵衛<sup>兵衛</sup>が掴<sup>つか</sup>かゝるをどつこいと。腕<sup>うで</sup>首<sup>首</sup>しつかと番<sup>ばん</sup>頭<sup>とう</sup>顔<sup>顔</sup>。縁<sup>縁</sup>切<sup>切</sup>たれ  
 ばおれが女<sup>女</sup>房<sup>房</sup>。ほでさいて何<sup>何</sup>んとする。お初<sup>初</sup>でかした。心<sup>心</sup>底<sup>底</sup>見<sup>見</sup>へた。夫<sup>夫</sup>レでこそ我<sup>我</sup>等<sup>等</sup>が女<sup>女</sup>房<sup>房</sup>。邪<sup>じや</sup>魔<sup>ま</sup>する二<sup>二</sup>才<sup>才</sup>め。出<sup>出</sup>てうせい  
 と。無<sup>地ワ</sup>理<sup>理</sup>に引<sup>引</sup>ッ立<sup>立</sup>テ門<sup>門</sup>の口<sup>口</sup>。突<sup>つ</sup>放<sup>まな</sup>されても凝<sup>こり</sup>たる無<sup>無</sup>念<sup>念</sup>。か<sup>か</sup>け入<sup>入</sup>んとする所<sup>所</sup>。蹴<sup>け</sup>倒<sup>た</sup>すはづみ徳<sup>徳</sup>兵衛<sup>兵衛</sup>は。うんと倒<sup>た</sup>る、有<sup>有</sup>様<sup>様</sup>を。  
 (二十オ) 見<sup>フシ</sup>せじと隠<sup>隠</sup>す戸<sup>戸</sup>口<sup>口</sup>にて。おはつ奥<sup>奥</sup>へ行<sup>行</sup>きや。アイサアいきやいの。アイ早<sup>地ウ</sup>ふくと頤<sup>おとかい</sup>で。教<sup>おしゆ</sup>る折<sup>折</sup>から下<sup>下</sup>女<sup>女</sup>の声<sup>声</sup>。  
 武<sup>詞</sup>右<sup>右</sup>衛<sup>衛</sup>門<sup>門</sup>様<sup>様</sup>。ヲイ。武<sup>武</sup>右<sup>右</sup>衛<sup>衛</sup>門<sup>門</sup>様<sup>様</sup>。ヲイ。なむ三<sup>じや</sup>邪<sup>ま</sup>魔<sup>ま</sup>と行<sup>あん</sup>燈<sup>とう</sup>の。灯<sup>とも</sup>火<sup>び</sup>ふつと。真<sup>ウ</sup>ツくらがり。門<sup>ハル</sup>トに伏<sup>フシ</sup>中<sup>中</sup>たる。徳<sup>徳</sup>兵衛<sup>兵衛</sup>は。  
 性<sup>ウ</sup>根<sup>ね</sup>付<sup>付</sup>よりたまり兼<sup>色</sup>。エ、思<sup>に</sup>へば憎<sup>にく</sup>い畜<sup>ちゆう</sup>生<sup>じやう</sup>めが。生<sup>ウ</sup>ケては置<sup>お</sup>カ<sup>カ</sup>じとさぐる戸<sup>戸</sup>の。明<sup>ア</sup>イ<sup>イ</sup>たは嬉<sup>嬉</sup>しと忍<sup>しの</sup>び入<sup>い</sup>。内<sup>うち</sup>のあいろは  
 見<sup>見</sup>へね共<sup>共</sup>。勝<sup>ハル</sup>ッ手<sup>手</sup>覚<sup>覚</sup>し包<sup>ほう</sup>丁<sup>てい</sup>店<sup>店</sup>。お初<sup>初</sup>は昼<sup>ひる</sup>より覚<sup>覚</sup>し戸<sup>戸</sup>口<sup>口</sup>。夫<sup>夫</sup>レと白<sup>あ</sup>刃<sup>やう</sup>の危<sup>あやう</sup>い場所<sup>場所</sup>。エ、け<sup>け</sup>たいな。け<sup>け</sup>さいでも大<sup>大</sup>事<sup>じ</sup>ない火<sup>火</sup>をけ  
 してたやした。お初<sup>初</sup>く。アイとおさつが聞<sup>ちが</sup>違<sup>ちが</sup>へ。ア、う<sup>う</sup>たてやわ<sup>わ</sup>れではないと。武<sup>ハル</sup>右<sup>右</sup>衛<sup>衛</sup>門<sup>門</sup>は納<sup>中</sup>戸<sup>戸</sup>の。方<sup>方</sup>へ入<sup>い</sup>ル跡<sup>あと</sup>へ。寐<sup>ウ</sup>間<sup>間</sup>  
 をそろく下<sup>下</sup>女<sup>女</sup>のさつ。物<sup>ウ</sup>も得<sup>え</sup>いはぬ互<sup>あ</sup>の相<sup>あ</sup>図<sup>ず</sup>。憎<sup>にく</sup>しと思<sup>思</sup>ふ徳<sup>徳</sup>兵衛<sup>兵衛</sup>が。(二十ウ) 手<sup>ウ</sup>先<sup>先</sup>きにさ<sup>さ</sup>はる帯<sup>おび</sup>の端<sup>はし</sup>。下<sup>下</sup>女<sup>女</sup>とはし<sup>し</sup>らぬ  
 うんの尽<sup>つき</sup>。持<sup>持</sup>つたる出<sup>で</sup>刃<sup>ば</sup>にてめ<sup>め</sup>つた突<sup>つき</sup>。うんと、し<sup>し</sup>る物<sup>物</sup>音<sup>おと</sup>に。逃<sup>ウ</sup>ケ行<sup>行</sup>お初<sup>初</sup>武<sup>武</sup>右<sup>右</sup>衛<sup>衛</sup>門<sup>門</sup>が。手<sup>ウ</sup>燭<sup>しやく</sup>片<sup>かた</sup>手に。ヤ<sup>詞</sup>ア徳<sup>徳</sup>兵衛<sup>兵衛</sup>か。

地ハル  
といふ間なく。足首取て刃返され。前成ル井戸へ真倒。ヤアなむ三宝人違へ。儕レお初め遁さじと跡を。したふて三重。上へいそぎ行

### 幸町の段

難波橋筋川風の。音トも涼しき表側。北辺町の養生所。座敷くんに。立並ぶ借屋八畳すり切に。其日仕廻イの働も律義屑に義助迎。かはいがられて世を渡る宿老の男とつはかは。夜番太鼓提なから。コレく義助殿。下役は暑(二十一オ)気で寐て居る。雇番が俄に目がまふて太鼓打ッ人がない。こな様雇います。隣町は今四つ打て居るちやつと廻つて下んせ急じやくくと云捨行。

ワツト雇イ賃は現銀じやぞや。只寐よふより銭設どりやいてこふか。イヤお重様慮外ながら坊主め寐さして下さりませ。イ、エイナ。昼はわたしに抱れてなれど肝心の乳がなければ。なんほいぶつても寐てじやない。ほんに又お岸様の愠気いさかひ。きのふから戻らしやんせぬも。わたしをお前の妾じやと気が廻つての間違ひ。わしや気の毒でならぬはいな。どぶぞ徳兵衛様の訳打明けて中直したい。ア、気のよはい事計り。コレよふ合点なされ。(二十一ウ) 国から付けて居るお前の事。ひよつとしれるとお前計りか徳兵衛様の身の上。女房にいふて聞ずは合点なれと。あいつが親の気はいが知れぬ。夫レでわざとお前をわしが色の様にして見せれば。きのふの様におこりくさつてマアどうよくな。此坊主めに乳も吞さず捨て出おつた。わたしも男の云が、り。去ったとはいふ物の。こいつをか、めに付てやらぬが中直る種の人賃。何のちつとの間の事。必か、めが戻らふ共。徳兵衛様の事いふまいぞへ合点かへ。アイ合点はして居れど。お岸様の身に成つても腹の立ッは尤。

術地ハルない者はわし一人詞リ。サアそこが男へ立しんぼテる辛抱。夫地ハルレはそふじやがが、めはおらず。大事のお前一人詞リ爰二二十二オ）  
置ばんイテ番屋には寐ちられぬ。エ、どんな役受ちケ取たわい。へッ何の別ちチに時さへ打ちて廻りや。番屋は明ちケて置ちイてもだんない事。  
ドレ時打ちがてら坊主ちめに乳囉ちふて参りましょ。時にと。太鼓ちとぶちで両の手はふさがる夫ちレよ。其手拭ちひで落ちさぬ様に稚ち子地ハルを背ちにしつかとくちり付ちケ。の、様見ちしよぞ泣ちなく。ハアうぢちくする中ちに四つがよつ程ち遅ちなつた。儘ちよ四つと夜半ちと打ち交ちにやつてこまそ。ねんちくねんちねちこせ。必ち外ちトへ出ちやしやますな。ねんちねがが、はとこへいた。いとを捨ちて里ちへいたちウキの辻ちから女房ちお岸。義助ちが帯際ちむづと取ち。コレ待ちツた用ちが有ち。エ、げんさいめ。隙ちやつた女房何にも用の有ちル筈ち（二十二ウ）はない。イヤくくちまだせりふが残ちつて有ちル。わしが影見ち付ちケるともふはづそふで。こりやどこへ行ちのじや。夜番ちに雇ちはれて廻ちるのじやはやい。何ちのせりふが残ちつて有ちル。ヲ、おれと縁切ちルからはあちの女子とも縁切ちてしまや。めうな事をぬかすわい。ありやおれが妾ちじやわい。サア其妾狂ちひが過ちキるわいの。其日過ちキの働ち人が妾所ちかいのふ。コリヤやい。王様にはお妾ちが十二人ち有ちわい。其王様でも持ちツた撥ちは同ち一本ち。妾置ちイたら何ちンじや。めんよふびんほ人ちの女房といふ者は。げびつちの底から悋ち氣ちしさつて男ちの身ち代ち搜ちしくさる。せいじやいの。隙取ちたから男ちじやない。男ちでなか構ちひかんな。儕ちレが根性ちの様な焼餅屋ちへなと嫁入ちし（二十三オ）おれ。夫ちレもこなたが構ちやんなと。女ち夫喧嘩ちの中に立ちツ。お重ちが氣ちの毒ち。マアく二人ちリながら氣をしづめて。此子ちはかほゆふないかいな。夕ちへからひもじがつて泣ちて計ちリ。あいそづかしいふ手間でコレ乳ち上ちケまして下ちさんせと。抱寄ちスれば母親ちへ。手ちそ、ぶりして行ちたがる。しんみの愛ちに互ちにほろり。親ちでもない他人ちのわしが顔見ちしつて何ちのこつちや。夕ちへから儕ちレやれ。モウ戻ちるまいと思ちふたれど。乳ちがはると思ちひ出してまんじり共寐ちら

れぬ故。夫レで呑のましに来てこました。ヲ、儻レが乳呑したい事はないけれど。こつちに拂ふつ抵びなによつて貰もらひてこます。とつくりと呑してやりくされ。サア憎にくけれど呑してこます。ヲ、嬉うれしいやらほや（二十三ウ）く〜と此かはいらしい顔見くされ。ドレ。ほんにあの呑よふわいと女め夫おいさかひいつの間にむちやに成たる子こ故ごの闇やみ。コレもふとろ〜寐ねるわいな。蚊かを追おてやつてくれくされ。夫レを儻レにならふか。あをいでこますとこうはいもうちわ喧けん嘩わのたはひなき。以前こゝろの男おとこが義助殿ぎすけ。番ばん屋やを明あけて時ときも打うたず。何なにして居ゐやると旦那だんな様さまが呵しかつてじや。今いま夜よは此町このまち四よつも夜半よなかもやくたいじやわいの。ヲイ〜〜此こげんさいめでとんと忘われた。思おもへば憎にくいやつでは有あルヲ、何なにじやの。めん〜の性しやう根ねのない事ことはいわずに。イヤこいつが〜男おとこを性しやう根ねなしとぬかすな。ヲ、いふた。ヲ、其その口くちをと太たい鼓このぶち。是こゝろはしたりマアか、を擲なすと。ちやつと太たい（二十四オ）鼓こ打うて行いかしゃれの。ヲイ合あ点てんじやド、どん〜〜〜どんくさいとおこりちらして打うて行い。サア〜申まお岸ぎし様さま。もふ申ま直ちつて今いま夜よから爰こゝに寐ねて下くださんせ。イ、エ。おてか様さまいらぬおせ、お構かまひな。邪じや魔ませぬ様さまにこちやいます。是こゝろから徳兵衛とくべゑ様さまに逢あて何なにもかも告つげてこます。一ひと体た男おとこは悪あく性しやうな。あの徳兵衛とくべゑ様さまも新あらた地ちのお初はつに打う込こで。どござでは身みを仕廻まわせうと。とほまず語かたりも。身みに当あたるお重おむねが胸むねにきつくりと。そんこゝろならアノお初はつ様さまは徳兵衛とくべゑ様さまの色いろかいなど。初はつて聞きいた娘むすめの悋りん氣きとしらぬ悋りん氣きか、。コレこゝろぼんをねさすかや釣つちんせ。何なにをふせう〜な顔かほする事こと。こな様さまと義助ぎすけ殿だんと二人ふたりりねる寐ね所ところきり〜さんせ。枕まくらも二ふたツ（二十四ウ）ならべくされ。あた憎にくてらしい男おとこが憎にくけりや坊主ぼくし迄まで。もふ蚊かにくはれてぬくされとそここゝに捨すても底心ちしん。跡あとへ引ひかる、後うしろがみ。涙なみだ隠ひそして立た帰かへる。

あみだ橋はしより徳兵衛とくべゑがかけ込こム門かど口ぐち。義助ぎすけ内うちにか。ヤア徳兵衛とくべゑ様さまか逢あたかつた〜。ほんにお前まへは聞きこへませぬと取と付けキ歎なげ

けば。イヤそつちの聞へぬよりおれが耳へは何にもはいらぬ。そなたにも逢ねばならぬ急な用でと夕月夜。一人りぼくくくる侍イ戻る義助を呼かけて。夜番もふ何ン時ぞ。サレバ何ン時でござりませふぞ。アノお手前もしらぬか。然らば外に尋たいは此辺に。果物屋の義助殿といふはないか。イヤ其義助殿は此夜番ン。ナニ其元トが義助殿。スリヤ私へお出なさる、のか。是はしたりと互の(二十五才) 挨拶。見付けるお重。悲しや国の兄様ンじやわいな。ヤアと狼狽徳兵衛も間所夏の蚊帳の内。ちいさふ成ッて隠れる。マアく是へと内へ伴ひ。シテ私には何ンの御用。イヤ別ッの事でもない。女を是へ出さつしやれ。はつと驚く色目を隠し。ハア女を出せとは此内を呼やじやと思召ス。左様な商は致しませぬ。イヤとぼけさつしやるな。手前播州の家中。則チ其元トがかくまひめされたお重が兄の桂曾平といふ者。傍輩山科久蔵へ縁付きさする筈の妹。不義の男有ッて当所へ欠落につくいやつ。僅五人扶持。小身の拙ッ者なれ共義士のいき路。久蔵への面晴。兄が手にかけぶち放しに参ッた。(二十五ウ) のさ。ハツ是非に及ぬ。いかに其妹御当地へお越なれ共。とをに他国へやりまして爰にはござりませぬ。其不義の男といふは此義助。行衛のしれぬ妹御より。マア私をいか様共サ御存分になされませと。覚悟極めし男氣にこらへ兼て蚊帳より。かけ出んと身をもむ徳兵衛。曾平に見せじと覆ひに成り。是はきつい蚊でござりますと。団ばたく紛らかす。曾平始終に目を付けて。ハテ扱お身は町人には見上ケた男。さつぱりと命投出して身に引かける。魂は。色こそ見へねかやは隠る、。飛で火に入ル夏の虫。網の中チの魚同前。今手にかける場所なれ共。義助。こなたに無(二十六才) 心シが有ル。身共連も一人りの妹。殊にニタ親も有ルやつ。真実は不便な妹が命を其元トに助けて貰ひたい。ソリヤどふして。サレバサ。お重に不義の男有ルと。噂は有レ共慥に見付ケた者もなし。此儘国へ帰つて久蔵へ嫁入しさへ

すれば。家中の沙汰は虚言に成つて互の武士も立子命も無難。義助が不義の男ならば。只今ふつつりと思ひ切て妹を渡しめされ。一人りと思へば二人の命。四つに成ルか思ひ切か生死の境はたつた一ト重。双方命助かるが眼前の徳。ナ。とくと分別極めよと詞の。謎を徳兵衛にかけて隔る蚊帳の関。

義助手を打。そふじや。なんぼどの様に思ひ合つても。肝心の体が胴切に成つては(二十六ウ)道行する事もならぬ。マア私は思ひ切ル氣じや。イヤ又是程訳の立つた事。誰レにしても得心で有そふな物。く。こふなされて下さりませ。今ン夜中に分別極め。明朝きつと妹御をお手渡し申しましよ。暫の間御看免。先ッお帰り下さりませ。成ル程く。併ン夜が明クれば人目に立ツ。今ン夜七つ前に迎ひの駕。身が旅宿からは凡三十町余り。八つの鐘を聞て参らふ。夫レ迄に必共今の詞の違はぬ様に。憎いやつでも真身の妹。連レ帰つて無事な顔。親共に見せたらば其悦びはいか計。若シ首にして帰つた時は老の悲しみ思ひやる。打放さねばならぬ所を。暫くも見遁して帰るは侍イでない此曾平。此差添を(二十七オ)後チ程迄其元トに預ケ申ス。中心の銘は国廣。妹が国廣ふに帰る思案を頼入。武士も及ばぬお身の性根。約束違へぬ互のかため。ハア委細畏り入ました後刻。く。と神ン国の誠をみがき別れ行。

徳兵衛お重は夢見た心地。義助跡を見送つて。諸事は今聞カしやました通り。何事もわしが悪ふはせぬ。徳兵衛様はマア爰には居られまい。サアわしも急に行ねばならぬ所が有つて。ソレく夫レがよかる。そんなら頼ムといひ捨に行をとむむるお重をおさへ。門トの戸びつしやり。いてござりませ。コレいふ事が有わいな。イヤもふ何ンにもいふ所じやない。コレお重様国へいんで久蔵様と添しやれずば。兄御や親御へ立ツ(二十七ウ)まいがな。但シ不義者に成つて手打にあふ氣か。最前ン

からのわりくどき大方合点の行そふな物。夜の短いに小短ふ。サア御思案を。く〜と義助が義理に義理かくる。手詰の道に責られて。兄様のさつきの御異見身にしみく〜と忝ふ。思ひ切ふと思ふても儘にならぬ因果な縁。お初様への入わけもなま中聞ねばよい物を。わしが国へいんだらば快ふお初さんと。女夫にならしゃんしゃうと思へば。妬しうて口惜しうて。国へいのより此儘でわしや死たいと徳兵衛の。外に添気は中々に思ひ詰袖。是非もなき。スリヤどふ有てもいなしやれぬか。よい〜そんなら仕様が有ル。もふ国へ（二十八才）もいなさぬ。徳兵衛にも添さぬ。こな様はおれが女房にする。エ、ハテ恠りする事はない。一体此様に世話するも眞実はおれが惚て居るから。兄貴の前迄不義の男は義助に成た上からは。毒くは皿。今夜中に連れて走ておれと中よふ添はいの。夫れもいやならたつた今。徳兵衛と二人ながら曾平の前へ引まづつていて。胴切にさそふか。サア夫れは。サア〜と詰かけてもとかくの返事なく計。サアどふじや。おれが女房に成ルのか。コレ。く。エ、此様に敵役に成ておどしても国へいぬ気はないか。夫れ程思ふ徳兵衛様を密夫にして殺さすのが可愛のか。お二人の命が助けたさに。義助が胸はさつきに（二十八ウ）から。氣違ひに成つて居るわいの。死る計りが心〜中じやないぞへ。譬いづくへ別れても。命さへありや又どふして成と逢れまい物しやない。よふ思案仕直してみやしやんせ。アレ隣町に早八つ打ッ。又打てこずば町代が呵おろ。エ、短い夜では有。もふ半時が命の境目。商売にてくる間々に。よいち急出して置カしやりませ。ア、浮世じやと投ヶ首にたいこぶら〜出て行

尤共道理共。よふ合点はしてゐながら。任せぬ物は色の道。聞へぬ男かはゆふて恨いふ間も何じややら。物さへ云れぬかやの内。残して有し一ッ通は。何ぞと取て灯火に見ればせはしい走書。

ナニ今宵人をあやめ候ゆへ。かげを致し候へ共。天の網通れぬ身の上。そもじ(二十九才)殿は国へ帰り命延はり下され候。是が一生の別れにて御座候。何事も未来にてあら〜かしく。そんな徳兵衛様は死る覚悟で暇乞にござんしたのか。ハア。そふとはしらず恨だはいな。かんにんして下さんせ〜。逆も生きては居られぬ此身。いとしいお前が死しやんすに何の国へいぬ物ぞ。私は先キへ死ます。未来で必逢ませうぞへ。と、様シか、様シ兄様シ赦して下さりませ。死る所はかはる共落付ク先キは諸共に。一トつ蓮と観念しなく〜。抜取差添にさいごをいそぐ時だいこ。八つは八苦か我身の血死期。氷の刃切先キを咽にがはと立ちながら。どふど後へ打こける行燈と俱にかやはづれ。わつと泣出す稚子の声や通して立戻る。

義助は(二十九ウ)何げも夏の夜の灯が消たは合点が行カぬ。お重様〜と行燈さぐつて釜の前。付ケ木にともす灯の光り手負を見るより転倒散乱抱起してなむ三宝早死切たか。エ、聞へぬ。殺す程なら此様に義助が臍は揉ぬわいの。曾平殿への云訳なし。徳兵衛様の身の上にかゝる難義を何とせん。門トの口には挑燈の光りはさつきの迎の駕。戸をしめる間も早駕に先キ立曾平が。頼ませう。〜もせはしなく子は泣頻に戸は叩く。胸は早鐘突詰し血汐の刃抜キ取つて。くつと突ツ込ム胸先キより流る、瀧つせ子は血まぶれ。血筋の縁の女房お岸。走つて来か、り気にかゝる内に。ヲ、うめく声。曾平も俱に心得ずと踏明くる戸の鑿はづれ。手負の有様見る(三十才)仰天お岸は夫トに取付いて。コリヤ何ンで死るのしや。わしに恨が有ての事か。たつた今徳兵衛様に逢て何にもかも様子は聞た。誤りましたこちらの人。こらへて。生きて下されと手を合すれば片息ながら。ナ、何にもいふ事はない。お重殿を殺したはおれじや。おれが死れば徳兵衛様にカ構はない。おれが事はカ構はずと子を大事に。〜と計りにて舌こはばつていはれねど今はの念力聞取ル曾平。妹が死だれば国元トへの云訳立。安堵

して往生せい。ア有難やと合す手は。此世からなる仏ヶの座。半座を分ける女房は。子故のかせに生き残る。死出の道連れ友千鳥明くる。戸口に徳兵衛かハツト恠り灯火と。俱に消行世の名残り後子の噂と。三重成にけり(三十ウ)

## 蜷川の段

振出すや。とつかけべい。さきのける。おなべがかゆ餅ねれたら持てこいがつてんだ。夕へも三百はりこんだ。はたかで道中成り物かアリヤコリヤしてこいな。どつこいふれくふりこめさ。ふりみふらずみかはりなく。賑はふ。里はしゞみ川。天満屋のおきちとて女ゴながらも大ぜいの。かゝへの子供それくに。仕込ム稽古の芸揃へ舞の。ふり付ケ踊の拍子。げい子がならふ浄るりの。ふしもなまめく花の宿。主シは店に線香の。煙にくすぼる下モ女子。いきせきと門ト口から。桜さん送つて下さんせ。アイ桜さんは上じやがとつからじやへ。綿長からで(三十一オ)ござんす。是はまあくたつた今揚先へ送りました。どれぞ外のは入ルまいかな。イエくおなじみのお客じやわいな。夫レはまあくお残り多い。又お頼申ますよふござんしたゑ。伊兵衛佐兵衛が忠義より女房くを古郷の。鞆によるべの公界させ。げい子のしげの様シ送りまして下さんせ。アイくどつからじやな。大岩からでござんす。アイ夫レ送りますコレしげのさん呼に來たぞへ。申大岩の。御苦労でござりますマア一ふくと吸付けたばこ。舞子様も人ならお頼申します。浄るりをよう語つてじやげいこ様シも有ル程にナちつと差込ンでおくれや。コレしげの様な身仕廻イがよか早ふお出。アイといふ間に三紋箱。さげて叩へる(三十一ウ)廻しの男。コレ戻りにかな伊と富升屋で。朝様シと時様シと若松様シを問て戻りやと。いひつゝ、火入に差くべる。線香は花火ならね共。花を愛する帳箱や。てうよ小てう

よせめて暫しは手にとまれ。時しも今はぼたんの花に。咲や乱れてちるはくちりくるは。く。ちれくくく。ちりかゝるようでおいとしようてねられぬ。花見て戻ろ。く。花にはうさをも打わすれ。ヲ、ふり付ケの貫蔵様シ小夜太夫様も御苦勞く。此暑いの台所のせはい所で稽古せずと。辰弥も小松も奥へ連れましていて稽古仕やいの。そしてお初がけさから塩梅が悪ルといふて寐て居やつたがまゝでもくやつたかや。エ、氣の(三十二オ)付ぬ衆では有ルぞ。小夜太夫様。貫蔵様シ。お前方もまゝでも上かつて。奥の間が涼しい程にナ。奥でゆるりと稽古して下さんせ。シタカどれもく不器用な衆でたんと御世話でござりませうと。卑下の詞に小夜太夫。イヤモ皆よう覚てゝござります。此里にげい子衆も多いが。イヤ又爰の辰弥様シ程宮菌をよう語るげい子様シもござりませぬ。夫レといふが根が好じやによつて教るに隙がいらぬ。サア奥へいてやりかけよかい。そんならそふして下さんせ。わしも此間に行水せうサア皆お出と打連して。奥の間さして入ける。

早黄昏は色町の。昼とか、やくかけ行燈。軒賑はしき其(三十二ウ)中に。ふびんやお初は夕へより。内へ戻つてとやかくと案し暮すは二十両の金の入わけ白髪町。親方の内の騒動より。どふならしやんした徳兵衛様シ。何にもしらずに今比は。不深切な女子じやと。嗚わしが憎からふ。云訳せうにもどふせうにも。どこにどふして居やしやんす。逢たい。逢たいわいなと伏しつむ涙。流れのうき身なり。よその歎きをよみ売りの。本と嘘とを出ほうだい。是は町々御ぞんじのかの娘は十八男は四十二。桂川の流を爰に道頓堀。外題は則追善桂川道行く。今日よりの軒ン板。節は則チ国太夫ぶしと。売声聞ク程胸に釘。差詰つたる。お初が悲しさ。スリヤ(三十三オ)今朝からの噂に違はず。お重様シと義助様シよもや二人のお衆

に不義徒は有ルまいが。どふした事で死しやんした。大方わしが受ケ合た二十両の金。其金が出来ぬ故夫レでの事でござんせう。堪忍して下さんせ。さらく—in 如在はなけれ共。なす事する事鴉の贅。人違へとは云ながら。人を殺せば遁れぬ科人シ。いとしう思ふ徳兵衛様—憂難義に逢しやんすを。何とまじく—in 見て居られう。わたしや覚悟を極メて居る。申お重様。追ッ付未来でお目にかゝり何かの云訳致しませふと。なく—in 内へ入ル姿。とくより見聞ク主ジのおきち。心を付けるのれんのかげ。奥は稽古の引キがたり。ふさは夫レ(三十三ウ) 共白紙の。障子の月をあかりにて剃刀出し合せ砥に。かゝらましかばかくとだに。今ま一チ度顔見て死たいと思へばひかるゝ。後がみ。手もわな。く—in 震ひける。おはつそこにか。何仕やると。いふに恫りふり返り。ヲ、お吉様シの何じややら。わたしに恫りさゝしやんした。イヤわがみよりわしが恫り。其剃刀は何仕やる。アノ是かへ。あんまりよい月。夫レでな額たれふと思ふてと。紛らかせば打笑ひ。ハテ夫レはまあよい所へきてわしも仕合。コレお初。けさから線香番した故か。肩がたんとつかへて有。そろく—in たいてもらぬかと。いふにいな共いな舟の。かひなき身にし。さとられじと。後へ廻りそろく—in たと、く心ぞおくれ髪。かき(三十四オ) 上くさする手の。ふるふを見せじふるはじと。心ぐるしき折も折。

奥よりもれる淨るりに。いと心をいたため居る。コレなふふさ。いつぞく—in と思ひしが。ついでにそなたに異見が有ル。我レも初メは勤の身。素人のいふ事と一つに聞クは。曲がない。心をしつめて聞てたも。廓や爰の奉公はたのしみなふてはつとまらぬ。むけなふせくではなけれ共。夫レにさへ猶かけ引キ有。必つま子有ル人と。末の約束せぬ事ぞ。男の間夫。同前にて。思ひばかのいかぬ物ぞとよ。徳兵衛様共今は挨拶切たと有ル。イエ—in 何の挨拶切ル物ぞ。切たといふは武右衛門

を。だまして金をもらはふ為。コレお初。ソリヤ何いやる。ありや辰弥か稽古の淨るり。イエくなんぼ淨(三十四ウ)るりでもけいこでも。徳兵衛様と縁切たとは。わしや聞とむない腹が立。アイタ、。是は又迷惑な。重様にきつうせずと。そろくともんでたも。其様にむごう仕やると。一もん中の。憎しみ受けそなたを鬼よ。蛇よといふ。又囀はれて世を忍び。後家同前ンに暮しても。夫レが何シの手がらぞや。余のお山衆と違ふて。十ヲの年シからこがいにて。豆腐とてこい。八百屋へ走れ駕呼ンでおじやはき掃除。戸棚の鍵迄預ケしは。ちいさいか、の。馴深だけ。我子の様に思はれて。よい客もがな出せ。下女の一人リも連レさせたふと思ふはこちと計りかは皆親方は同し事。訳もない事仕出してむごいめ見せてたもん(三十五才)なや。為のよい事有ならば今でも暇くれといや。欲をはなれた是證據。損といふて僅の事。ふびんなめを見よふかとあんじ過しがせらる、ぞや。思ひも寄ぬうれひをかけ。必なかせてたもんなと。涙も声もしめくと。残る方なき恩の程。コレはつ。あの淨るりは重井筒。何ンと面白い事じやないか。わがみもそはくせずと。氣をしづめてよふ聞きや。や。といへ共現空蟬の羽がなほしや其人の。傍へ飛ンでも行たやといわず心の涙川身もうく。計り見へにけり。主は夫レとしりながら。わざとそしらぬ顔付にて。コレお初。此間からいふと思ふて居たれど。事が多さに忘れて居た。外の事でもないそなたの名の(三十五ウ)事。こちの家名は天満屋。わがみの名はお初。天満屋のおはつといへば。どうやらぎんも悪ルいによつて。わがみの名を替ふと思ふて。よい名を二つ拵へて差紙に迄書して置いた。氣に入たら此差紙。すぐに呼や衆へ配らすつもりと。かけ硯より杉原に書いた差紙取出し。コレ此二つの内どちら成り共。氣に入れた名に仕やと。いへばお初も顔ふり上。何のまあ夫レをわたしに問ず共。お前様よい様にと。云つ、差紙取上て。新造さの。ヲ、さのと

はよい名でござります。最一つの名は法名釈の妙心シ。コレハ。何シとよい名であらふがの。どちらに仕やるぞ。エイ。さ  
のといふ名に改めて。まめで達者で勤る気か但シ(三十六オ)妙心シ信女と改て。親達チに逆カ様な跡弔はす了簡か。サア  
どふ仕やると親方の。心を見ぬく一言に。初はとかうを。泣ク計リ。コレ泣ク事は一トつもない。こちの内へおじやつてから。  
まだ間のないそなたなれ共。南の母様がくれくとの頼。徳兵衛殿といふ色の有事も。何かの咄しも聞てゐる。といふて思  
ひ切りやと云ともせぬ。又異見もせぬ。何にもわしいはね共。あの重井筒の浄るりが。色に身を打ッ女郎の手本。殊に徳  
兵衛といふ名も同じ事故。わしがいふ事はずにいて。人を頼んで語つて貰ふ。重井筒の浄るり。異見シの段が身にしまは。  
無分別を出さず共。さのといふ差紙を。呼や衆へ賦らしたも。(三十六ウ)戒名書て仏ツ檀へ。必はらしたもんなど。  
目には涙を持ちながら泣キ顔かくしさつはりといふに哀ぞこもりけり。

お初は正体泣くづおれ。おなしみもない私に今のお詞。骨身にしみ込。有かたい共忝い共親にもまさる御深切。何シの無下  
に致しませう。必々。お心遣ひ遊して下さんすなどいふ跡声も涙にてさらに。正体なき折から。表の方へかこ使イ。私は  
難シ波新地お初様シの母様の所から参りました。何やら急に相談のしたい事がござります程に。御無心シながらお初様を。ち  
よつと只今お戻しなされて下さりませ。直クにお供して戻れとでござりますと。聞にぎつちりお初が胸。徳兵衛様から廻し  
の使と。思へは飛立ッ(三十七オ)心をしづめ。申あの様に申てさんしましたを。いはすにいたら又か、様が腹立テらる、  
でござりませう。つい一ト走いてきてても大事ござりますまいかと。いふに合点はいかね共。ふしぎも立テず打点き。ヲ、  
夜ルよなか呼にくるは。何ぞ急な用である。夜の更ケぬうちいたがよい。迎ひの人が見へたれば。送らしてやるにも及ばぬ。

サア身拵へして早ふ行きや。アレ使の人が待てじやわいの。コレお初。是はコレ九重の守る。氣のうつとりとした時は。ゑて狐が化す物。是さへかけて居れば。化さるゝ氣遣ひない。まだ夫計りじやない。悪ク事災難。劔難よけ。今の先キいふた事を。必忘れてたもんなやと。守り渡せば押しいたゞき。(三三七ウ) 何から何迄忝ふござります。コレ何の夫レを泣ク事。早ふいて早ふ戻つてたも。おそいとわしがあんしるぞと。いふも泣キ声。こなたも泣キ声。アイ。そんならちよつといてさんじませう。と男を連れて表の方。しほ。出るを呼ぶ。小引出しより十四五両つゝんで門へ投ケ出し。それも筐じや持ッていきや。と迄は得思ひあきらめぬ。わつかなれ共其金は。もし急病のおこつた時。事によつては附子。人參より。人の命をたすける妙薬。金が敵といわりやんな。いておじや。さらばと戸をぴつしやり。明けていわれぬこゝろとこゝろ迷ひ。へゆくこそ。三重(三十八オ)

### 野川の段

月は出もせで浪はいそべに打よせられて。よはひ久しきしらひげの。そこでせい久あんど。色事さんずな氣にかゝる。ほい。のほいと。夜も早ふけて。しん。空晴渡る天満やのお初は足も地に付カず。こけつまるびつ裏道伝ひ。息次あへず。徳兵衛様。くと。呼どこたへのないのはふしぎ。慥かに爰に待ての答。随分急げと女の足。遅かつた故尋に行はなされぬかと。思案斗方にとつ置イつ心もくらむ暗紛れ。聞覚有足音トに寄りや因果の車の輪廻り合たる。星明カリ。ヤア徳様。か。お初が待ッて居たと肩先キぐつと用(三十八ウ) 意の出刃。アツト計りに倒れ伏又ふり上て突んとすコレ待ッた徳兵衛様。早まるまいと云つゝも。跡へくと身を引ク。拍子思はずくぼみへこけ落れば。ヤア逃ぐる速逃カそふか卑怯者

めと追廻す。コレ比興なれば声立てる。命は惜まぬいふ事はせて下されと。いふをも聞はず取ッて引キ寄せ咽をぐつと突刃。すがるも今はの一チ念力。刃物をしつかと動かせず。ヤイ畜生め。是迄儕レに心尽した。此徳兵衛をふり捨て。よふ武右衛門めに肌ふれたなア。また其上に下女のさつを。儕レと思ふて殺したは。邪魔に成ル此徳兵衛。人殺しにする二人が仕事。口おしうてくかんにながならぬわいやい。不心ン底な人でなしめ。観念ひろげ。ヲ、腹が立ッは尤じや。此刃物をぬ(三十九才) けばわしや死る。息の有ル内一ト通りどふぞいはせて下さんせ。ヲ、所詮助ぬ命云事あらばきりくぬかせと。せきにせいたる夫トの顔。見る目も涙くもり声ノウ徳兵衛様。お前の命を助るは金がなければならぬと聞。金がほしさに武右衛門が惚たといふを幸いに。心に思はぬ色じかけまだ。其上を疑ふて證拠の為に起請をば。破れといふも又難題。破たのもお前の為。心尽したかいもなく金の工面も間違ふて。お重様へ義理立ッずまだ其上に情なや。かはいひお前は人殺しと。聞た時の其悲しさ。所詮此身は金の義理立ッぬ上猶お前の難義。死ると覚悟極めて居る。云置ク事は是計り。永い未来で待ちますと誠頭はす疵口の血汐に。涙(三十九ウ) あらそへり。

徳兵衛聞より恟りし。扱はそふいふ心とはしらず。早まつた事をした嘸苦しかるコレ。こらへてたもと抱付キ。身をくやみたる男泣心の。内ぞいぢらしし。ア、何事も前シの約束。所詮わたしは助からぬ。お前は此金を路銀にして。人の見ぬ間に早ふ逃けて下さんせと。苦しき中にも一ト筋に。夫トを思ふ真実の。詞に徳兵衛なを涙。イヤく人殺しの此徳兵衛。何国へ逃ても遁れぬ命。殊にいとしいそなたを手にかけ。生きて居る心はない。爰で一ツ所に死るがせめての云訳ぞや。そんならどふでもお前死る気か。エ、是非もない。ア、くるしうてもふ目が見へぬ。サア此刃をぬいて苦痛を助ケ下さんせと。

いへど今さら徳兵衛（四十才）も何とせんかた涙にくれ。憎しと思ひ突込たれど。恨も晴て今はこの刃。ぬけばそなたは死にやる物どふ刃物がぬかる、物と。打しほるれば。ア、返らぬお詞。そんなら未来で待て居まする。さらばくと我レとわが。刃物をぬけば息たへて。草葉の露となりけりわつと計に徳兵衛は。お初が死骸に取付いて正体。涙にくれけるが性根を定めてヲ、そふじやお初。今追ッ付クぞ待ッて居やとすでにかうよと見へたる所へ。お岸を先に久右衛門桂曾平もかけ来り。聊爾すなと刃物もぎ取。今一ト足早かりせばかゝる次第は見まい物。さつを殺せし間違ひは武右衛門が科となり。お初はじがい（四十ウ）といひふらさば代官所の咎も有ルまじ。命ながらへ三人の跡とむらふが追善供養。心得たるかと曾平が一ツ句。悦ぶお岸久右衛門心もひらく平野やの。徳兵衛お初が世語を今に。残して竹本の尺せぬ。世代こそめでたけれ

作者連名

近松半二

八民平七

寺田兵蔵

竹田文吉

竹田三郎兵衛

（四十一才）

竹本鐘太夫

明和五年

戊子七月朔日

浄瑠璃太夫連名

竹本政太夫  
竹本咲太夫  
竹本筆太夫  
竹本木々太夫  
竹本戸根太夫  
竹本の太夫  
竹本彦太夫  
竹本組太夫  
竹本住太夫  
竹本染太夫  
**竹本嶋太夫**  
竹本君太夫  
竹本倉太夫  
竹本梶太夫  
竹本尾上太夫  
竹本雛太夫  
竹本八津太夫  
竹本村太夫

竹本菊太夫  
竹本綱太夫

(四十一ウ)

右之本頌句音節墨譜等令加筆候

師若鐮弟子如縷因吾儕所伝泝先師

之源幸甚 竹本義太夫高弟

予以著述之原本校合一過可為正本者也

近松門左衛門

京二條寺町西<sub>江</sub>入丁

山本九兵衛版

大坂北久太郎町中橋筋

吉川宗兵衛版

江戸大伝馬町三丁目

鱗形屋孫兵衛版

(四十二才)